

ペテロ第一3章8-22節 「善のための苦しみ」

1A 祝福する生活 8-12

1B 兄弟愛による一致 8

2B 悪への応答 9-12

2A 正しい良心による弁明 13-17

1B 心であがめるキリスト 13-15

2B 罵る人の沈黙 16-17

3A キリストの身代わりの死 18-22

1B 悪者のための身代わり 18

2B 不従順な霊に対する宣言 19-22

本文

ペテロの手紙第一 3 章を開いてください、私たちは 7 節まで読みましたが、8 節から読みます。私たちはペテロ第一の手紙を通して、世におけるキリスト者の証しについて読んでいっています。時代は、ローマによるキリスト者への迫害が強まった時のことです。もしかしたら、パウロがローマで皇帝ネロによって死刑が出て、それで残された小アジアの諸教会に対して、ペテロが彼らを励ますために宛てた手紙ではないかとも言われています。これまで、ペテロが、彼らが試練を受けていることを前提に話している箇所を読んでいます。「1:6-7 そういうわけで、あなたがたは大いに喜んでいます。いまは、しばらくの間、さまざまの試練の中で、悲しまなければならないのですが、信仰の試練は、火を通して精練されてもなお朽ちて行く金よりも尊いのであって、イエス・キリストの現われのときに称赞と光栄と栄誉に至るものであることがわかります。」

そして 2 章において、キリスト者であるということだけで誹りを受けるような、キリスト者には居心地の悪い社会にいることをペテロは話しています。そのようなところで、いかにキリスト者としていかに立派にふるまえるのかを教えています。「2:12 異邦人の中にあつて、りっぱにふるまいなさい。そうすれば、彼らは、何かのことであなたがたを悪人呼ばわりしていても、あなたがたのそのりっぱな行ないを見て、おとずれの日に神をほめたたえるようになります。」ただでさえ、キリスト者だということだけで謂れのないことを言われます。しかし、そういう時だからこそ実は証しを立てる機会であるともいえるのです。立派な行ないを見て、悪人呼ばわりしている人々がかえって神をほめたたえるようになるのだ、ということです。私たちは、日曜の礼拝において、ダニエルの生涯を読んできましたが、まさにその証しでありました。ネブカデネザル王が神をほめたたえました。メディア人のダリヨスが神をあがめました。

そして、どのようにして立派にふるまえるのか、その具体的な勧めを 2 章 13 節以降で行なつて

いました。一つは、「人の制度に従う」ことでありました。王であっても、総督であってもそうです。つまり、これは国に立てられている人を敬うこと。それから法律を尊び、また行政の指導も遵守することでありましょう。大事なのは、当時のローマ皇帝も、総督もキリスト教に対して好意的ではなく、むしろ圧迫を与え、迫害するほうでありました。決してキリスト者の好意的だから、敬いなさいと言ったのではありません。

次に、「主人に従う」ことが 18 節以降に書かれています。ここでも強調点は、「善良で優しい主人に対してだけでなく、横暴な主人に対しても従いなさい」ということであります。主人に従わないことによって、罪を犯して打ち叩かれるのではなく、不当な苦しみであってもその悲しみをこらえるなら、喜ばれることだと教えています。そして、ペテロはこの生き方、生活の根拠を、キリストに求めています。主が十字架に至るその苦しみは、不当なものでありましたが、イエス様は罪を犯さずに、罵り返したりすることはありませんでした。

1A 祝福する生活 8-12

こうやって、神を知らない異邦人の間で立派にふるまうことについて教えました。そして 8 節から、「最後に」という言葉から始まります。これは、手紙の終わりの言葉ではないようです。他にも使徒の手紙で、ピリピ 3 章 1 節、テサロニケ第一 4 章 1 節でも、「最後に」という言葉が出てきているのに、その後の話が長いです。これは、「ついに」という意味合いが強い言葉でしょう。本題に入るけれども近い言葉であると思われる。ここまでペテロが語ってきた中で、ついに、「キリスト者が生きるのに圧迫を受ける環境において、そこでどのようにふるまうべきか」という内容において、「ついに」あるいは「最後に」という言葉になっています。つまり、話の佳境を迎えているということです。

1B 兄弟愛による一致 8

8 最後に申します。あなたがたはみな、心を一にし、同情し合い、兄弟愛を示し、あわれみ深く、謙遜でありなさい。

ペテロは第一の手紙で、キリスト者の生活の両輪を述べています。一つは、教会外に対して立派にふるまいなさいということです。もう一つは、教会内におけるふるまいです。それが、「兄弟愛を示す」ということであります。「1:22 あなたがたは、真理に従うことによって、たましいを清め、偽りのない兄弟愛を抱くようになったのですから、互いに心から熱く愛し合いなさい。」と書いていました。

大切なのは、「心を一にし」することです。キリスト者が神から求められていることは、御霊による一致であります。イエス様が捕えられる夜に、父なる神に対して祈られた願いがあります。「ヨハネ 17:21 それは、父よ、あなたがわたしにおられ、わたしがあなたにるように、彼らがみな一つ

となるためです。また、彼らもわたしたちにおるようになるためです。そのことによって、あなたがわたしを遣わされたことを、世が信じるためなのです。」私たちは、個人主義の発達した社会に生きているので、どうも自分自身の神との関係のみに目を留めがちです。自分がキリストにあって、神の前でどうなのか？ということです。けれども、イエス様が最も大切な戒めとして、神を愛しなさいと言われた後に、隣人を自分自身のように愛しなさいとすぐに言われたように、神を愛することが、そのまま人への愛との関わりの中で行ないます。私たちが、御霊の一致を保つことが神の御心の中でいかに大切かを知らされます。そして一致を保つことによって、それが世に対する証しとなります。自分は自分だけの信仰ではありません。他の兄弟たちの信仰と共に生きています。

そして、その一致は意見を同じくすることとは限りません。キリストの体はむしろ、多様性があります。器官はそれぞれ異なります。賜物も異なるし、働きや奉仕も異なります。主は、私たちが画一的、単一になることを望んでおられません。いろいろな個性のあるところに、有機的な一体性を求めておられます。コリント第一 12 章には、キリストの体とその器官があって、それぞれがいたわり合うことについて書いてあります。そしてキリストという大義の中で、自分自身の願いや思いを横に置くことであります。そしてペテロは、ここでその話をしています。「同情し合い、兄弟愛を示し、あわれみ深く、謙遜でありなさい」であります。同情するというのは、共に苦しみ、共に喜ぶという完成のことです。そして兄弟愛は、その言葉のとおり、自分と他の信者が神の家族として一つになっているのだということです。

そして、「憐れみ深い」ということでありますが、今日、私たちは、弱者や被害者に寄り添うことがそのまま善であるとされている世の中に生きています。特にキリスト者は、「弱い者」に寄り添うことがそのまま善でありと言われます。しかし聖書では、そのようにはみなされていません。パウロは、テサロニケ第一 5 章 14 節でこう言っています。「気ままな者を戒め、小心な者を励まし、弱い者を助け、すべての人に対して寛容でありなさい。」弱い者を助けるということには、気ままな者を戒め、小心な者を励ますということも含めて行なわれます。ですから、イエス様の教え、また社会的な規範というものから外れていることについて、それまでを是認していくような憐れみではないのです。そして、「へりくだり」は自分自身の立場が危うくされるような時にも、それを守ろうとして主張しないということです。

2B 悪への応答 9-12

9 悪をもって悪に報いず、侮辱をもって侮辱に報いず、かえって祝福を与えなさい。あなたがたは祝福を受け継ぐために召されたのだからです。

ここからが教会外に対する人々に対するキリスト者の態度を、取り扱っています。「悪をもって悪に報いず」は、行為です。そして、「侮辱をもって侮辱に報いず」は「言葉」であります。行動においても、言葉においても、私たちは悪に対して悪で対抗しないということです。悪に対する報いは

神が行なわれます。正しい裁きに任せて、私たちはその悪を自分も行なうことにとって、自分自身もその同じ罪を犯さないようにするのです。

そして、「かえって祝福を与えなさい。あなたがたは祝福を受け継ぐために召されたのだからです」とあります。これは、おそらくはアブラハムに対する神の約束に基づいているのでしょう。「そういうわけで、信仰による人々が、信仰の人アブラハムとともに、祝福を受けるのです。(ガラテヤ 3:9)」ヤコブのことを思い出してください、彼は神の御使いと格闘して、祝福を受けることなしには、あなたから離れないと言って、あきらめませんでした。そして祝福を受け継いだのです。私たちは日曜日に、赦すことについて、その力がイエス様によって与えられているけれども、その権威を行使しなければいけない、と言っていましたね。祝福も同じです。私たちはアブラハムの祝福を、異邦人でも信仰によって受け継ぎました。その遺産を、自らの意志によって他者を祝福することによって、祝福を受けていることを示していくのです。

10 「いのちを愛し、幸いな日々を過ごしたいと思う者は、舌を押えて悪を言わず、くちびるを閉ざして偽りを語らず、11 悪から遠ざかって善を行ない、平和を求めてこれを追い求めよ。

これは詩篇 34 篇 12-16 節にある言葉です。ダビデが、子たちに主を恐れることを教えていることを教えています。「いのちを愛し、幸いな日々を過ごしたい」ということですが、霊的な命、霊的な幸いのことです。キリスト者が不当な苦しみを受けたとしても、それでもそこに命と幸いを見いだすことができます。それは、人を祝福する生活です。罵られたら罵り返す、悪いことを言われたらそれを心に抱いていて、苦みとする。こういう悪循環の罠に陥らないようにする、ということです。「舌を押えて悪を言わず」とあります。私たちが何か悪いことを言いたくなったら、その時は舌を押さえます。そして、悪いことを言ったら、それは必ず「偽り」となります。自分では正しいと思っても、偽りであります。このように言葉、口を制して、それから行動にも出ます。「悪から遠ざかって善を行ない」であります。そして、その結果として、「平和」が保たれます。パウロは、自分に関する限り、平和を保つことをローマ 12 章で教えました。

2A 正しい良心による弁明 13-17

1B 心であがめるキリスト 13-15

13 もし、あなたがたが善に熱心であるなら、だれがあなたがたに害を加えるでしょう。14 いや、たとえ義のために苦しむことがあるにしても、それは幸いなことです。彼らの脅かしを恐れたり、それによって心を動揺させたりしてはいけません。15 むしろ、心の中でキリストを主としてあがめなさい。そして、あなたがたのうちにある希望について説明を求める人には、だれにでもいつでも弁明できる用意をしておきなさい。

善を行なえば、人々は自分に害を加えることはない、ということです。今、善を行なって平和を求

めなさいとありましたが、そうですね、善を行なっているのであれば、相手はそしる理由がなくなってしまう。相手がそしる、悪を行なえば行なうほど、自分がそれに対して善でお返しをするなら、相手が黙ることになるでしょう。そして、もしかしたら相手が「彼には、何かがいる。神、キリストがいるのか？」と思うようになることでしょう。

けれども、正しいことを行なっているから、そのために苦しむことがあります。その時の態度について、ここで学んでいきます。ここの箇所は、イザヤ書 8 章 12-13 節からのものです。そこを引用します。「この民が謀反と呼ぶことをみな、謀反と呼ぶな。この民の恐れるものを恐れるな。おののくな。万軍の主、この方を、聖なる方とし、この方を、あなたがたの恐れ、この方を、あなたがたのおののきとせよ。」ここの背景は、預言者イザヤがユダのアハズ王に対して預言したことがあります。覚えておられるでしょうか、北イスラエルの王がアラムの王と共謀して、南ユダに攻め入ろうとしました。その知らせを受けたアハズが、非常に恐れましたが、イザヤは、「彼らは来ない。あなたは信じなければ、立っていることができない。」と預言しました。けれどもアハズは、信じないでアッシリアにお金をつぎ込んで、アラムと北イスラエルを倒してもらうことにしたのです。しかし、それはかえってユダを苦しめることになるということも、イザヤは語ります。アッシリアが北イスラエルを倒すだけでなく、南ユダにも攻め入ってきます。けれども、神は共におられる、インマヌエルと預言しました。この預言は、アッシリアに頼るという政治状況から真っ向から反対するような内容でありました。”人気がない”説教内容でした。また反発を呼んでいました。それで、主がイザヤに言われたのです、「この民が謀反と呼ぶことをみな、謀反と呼ぶな。この民の恐れるものを恐れるな。おののくな。」そして、「万軍の主、この方を、聖なる方とし、この方を、あなたがたの恐れ、この方を、あなたがたのおののきとせよ。」であります。

私たちキリスト者が、ただキリスト者として生きるだけで、脅かしを受けることがありますし、他の大勢の人とは反対のことを考え、行なっていることがあります。私たちの戦いは、しかし外側にありません。内側にあります。「恐れ」との戦いです。「彼らの脅かしを恐れたり、それによって心を動揺させたりしてはいけません。」とあります。「恐れを恐れよ」という言葉がかつてのアメ리카大統領、ルーズベルトが言いました。私たちが、「これこれをしなければいけない」として動いている時、それはしばしば、恐れまた不安から自分を守ろうとして動いている場合があります。そのために、信仰を働かせていたいの、神がどこにおられるのか分からなくなります。イエス様が言われたように、「神を信じ、また私を信じなさい。(ヨハネ 14:1)」であります。

そして、「むしろ、心の中でキリストを主としてあがめなさい。」とペテロは言います。預言者イザヤは、「万軍の主、この方を、聖なる方とし、この方を、あなたがたの恐れ、この方を、あなたがたのおののきとせよ。」と言いました。つまり、主が主なる方としてあがめなさい。この方を畏れかしこむのであって、他のことを恐れて、神を過小評価してはいけません。神が神であられるように、あがめていきなさいということです。これがいかに大事なことであるかは、私たちはダニエルの生涯で

学んできました。ダニエルが、王の食べるごちそうによって自分の身を汚すまいと心に決めました。ダニエルの友人三人は、金の像にひれ伏すことを拒みました。そこには、絶えず主を聖なる方としていくこと、主を主としていく心にある恐れがあったからです。私たちが、言葉で語らなくとも、キリストが主であると心の中であがめているのです。

「そして、あなたがたのうちにある希望について説明を求める人には、だれにでもいつでも弁明できる用意をしておきなさい。」と言っていますが、この「弁明」というのが、英語では apologetics と言って、「弁証論」とか「護教論」とか呼ばれるものです。それは、神を信じない世に対して、キリストへの信仰を証明するという議論、主張であります。けれども、ここでは正確には、もっと生活に密着したことです。キリスト者であるということだけで、軽蔑されたり、奇妙だと思われたり、脅かされたりする中で、けれども、なぜそのように信じているのか？と尋ねられた時に、「あなたがたのうちにある希望」すなわち、キリストが甦られたのだという生ける希望(1:3)について、説明できるようにしておく、ということです。

そのような機会は、必ずやってきます。ここでは、積極的に路傍で伝道するような類いのものではなく、「なぜ、そんなことを考えているの？」など、相手から尋ねられて、キリスト者だからという理由しかないような状況であります。例えば若い人であれば、会社の中で結婚が話題になるかもしれません。そして、自分の結婚観を話すことがあるでしょう。たぶん、驚かれると思います。けれども、そこで「なんで、そんなことを考えるの？」と尋ねられたら、「私はクリスチャンなので・・・」と話を始めることができます。このように、自分のキリストに対する希望について、説明できるようにしておくということでもあります。パウロの場合は、カイザリヤで総督に対して弁明していました。そして、ユダヤ教の改宗者であるヘロデ・アグリッパ二世に対して、自分の抱いている希望について、復活されたイエス様について、はっきりと宣べました(使徒 26 章)。

2B 罵る人の沈黙 16-17

16 ただし、優しく、慎み恐れて、また、正しい良心をもって弁明しなさい。そうすれば、キリストにあるあなたがたの正しい生き方をののしる人たちが、あなたがたをそしったことで恥じ入るでしょう。

説明、弁明しているのに、相手を責めるような言い方では、証しになりません。自分を守るために、自己擁護をするかのように話さなくてよいのです。「正しい良心をもって」とあります。つまり、主ご自身がその場におられることを信じて、主から与えられたことをそのまま、静かに、しかし確信をもって話せばよいのです。このように、主は私たちに、教会外の人々に対して絶えず、態度を求めておられます。優しさ、慎み深さが必要です。間違っても、この世は悪魔のものであり、私たちは神のものであるから、対峙しなければいけないという態度であってははいけません。むしろ、神がそこに自分を遣わしてくださっているのだから、神の証しを立てるためにいるのだから、優しさと慎み深さをもって、正しい良心の中からキリストの希望を語るのです。

そして、悪に対する対抗の仕方が、ここに再び書かれています。「キリストにあるあなたがたの正しい生き方をののしる人たちが、あなたがたをそしったことで恥じ入るでしょう」であります。悪に対して悪ではない、正しい生き方によって相手に打ち勝ちます。行ないというのは、強力な証しの力を持っています。イエス様も基本的に、不信仰のユダヤ人に対して良い行ないによって伝道していました。「ヨハネ 10:37-38 もしわたしが、わたしの父のみわざを行なっていないのなら、わたしを信じないでいなさい。しかし、もし行なっているなら、たとえわたしの言うことが信じられなくても、わざを信用しなさい。それは、父がわたしにおられ、わたしが父に在ることを、あなたがたが悟り、また知るためです。」本人は、神を信じるに至るまでいかなることもあるでしょう、しかし、神を信じているあなたを信じるころまでは行くかもしれません。「この人には神がおられる」となる可能性があるのです。それで、自分が罵っていたことを恥じ入るのです。

17 もし、神のみこころなら、善を行なって苦しみを受けるのが、悪を行なって苦しみを受けるよりよいのです。

これが、ペテロ第一のテーマです。罪を犯してしまう、法を犯してしまうとか、主人の言うことを聞かないであるとか、そういったことで苦しみを受けることは益になりません。けれども、神は時に、善を行なって苦しみを受けることをお許しになり、そのことは良いことなのです。私たちは苦しみを受ける時に、自分を責めてしまうことがあります。何か自分が欠けていたのではないか、うまくっていないのは、自分がこんなことを言ってしまったからではないか？いろいろ悩みます。そんな時に思い出してください、神の御心によっては、善を行なって苦しみを受けることがあるのだと。それは良いことなのだ、ということを知ってください。

3A キリストの身代わりの死 18-22

そしてペテロは、その手本、模範をキリストに求めます。既にペテロは、2章の最後においてキリストが善を行なって苦しみを行われた方として挙げていました。そして今から、18節からは、私たちがこの方につながれていることを、バプテスマによって示されていることを見ていきます。

1B 悪者のための身代わり 18

18 キリストも一度罪のために死なれました。正しい方が悪い人々の身代わりとなったのです。それは、肉においては死に渡され、霊においては生かされて、私たちが神のみもとに導くためでした。

イエス様は、罪のために死なれました。自分のした悪いことのためではなく、正しい方であり、ご自分のためではありませんでした。もちろん、私たち悪い者、罪犯した者のために身代わりに死なれました。したがって、善を行なってかえって誇りを受け、苦しみを受けるということは、キリストにつながれているのであれば、父の御心としてあり得るのです。

それから、「肉においては死に渡され、霊においては生かされて、私たちを神のみもとに導くためでした。」とあります。肉体において死に渡された、ということは十字架の上で死なれたということです。そして、霊において生かされたというのは、二つの解釈があります。一つは、イエスご自身の霊であります。主は肉体は死に渡されましたが、イエス様ご自身の霊が死んだ訳ではありません。いや、生かされました。主は、十字架にかけられた時に十二時辺りに、空が真っ暗になりました。そして、「我が神、我が神、なぜわたしをお見捨てになられたのですか。」と祈られました。その時に罪が置かれて、父なる神から引き離された経験をされました。けれども、主の霊は、再び父なる神と一つになり、生かされたという解釈です。そして、もう一つの解釈は、ここが霊ではなく、御霊とする解釈です。イエス様は、肉体をもって復活されました。その復活が、神の御霊によるものだということです。父なる神が御霊によって、イエス様を甦らせました。「ローマ 1:4 聖い御霊によれば、死者の中からの復活により、大能によって公に神の御子として示された方、私たちの主イエス・キリストです。」

そしていずれにしても、主がこのようになられたのは、「私たちを神のみもとに導くため」とあります。主が身代わりの死を遂げてくださったので、私たちは、神のみもとに導かれました。同じように、キリストにつく者は、良い行ないによって、たとえ誹りを受けても善を行なうことによって、その肉体において苦しみは受けていたとしても、霊は神に生かされています。そして、その迫害している人がもしかしたら、神のもとに導かれるかもしれないのです。

2B 不従順な霊に対する宣言 19-22

19 その霊において、キリストは捕われの霊たちのところに行ってみことばを宣べられたのです。
20 昔、ノアの時代に、箱舟が造られていた間、神が忍耐して待っておられたときに、従わなかった霊たちのことです。わずか八人の人々が、この箱舟の中で、水を通して救われたのです。

ここは、聖書全体の中でも難解な箇所と言われています。主に三つの解釈がありますが、その解釈を話すまえに、文脈を忘れないようにしてください。キリストに私たちが結ばれており、キリストが模範となって私たちも謂れのないそしりを受けても、正しい行ないによって証しを立て、神に人々が導かれるということでもあります。その文脈があって、次にノアが模範となります。彼は神を畏れかしこみ、正しい良心を持ち、それで証しを立てました。それから神の裁きが来ました。ペテロ第二 2 章 5 節に、「昔の世界を赦さず、義を宣べ伝えたノアたち八人の者を保護し、不敬虔な世界に洪水を起こされました。」とあります。

第一の解釈は、「捕われの霊たち」はハデスにいる者たちの霊、という解釈です。ノアの時代に、ノアの説教を聞いても悔い改めなかった者たちがいます。彼らは水の裁きによって死に、陰府に下りました。あの金持ちとラザロの話のように、陰府、ハデスにはアブラハムの懐という、慰めのところと、熱く燃えている苦しみの所があります。神を侮っていた者たちは、死後、その苦しみの所に

入ります。けれども、キリストが十字架に付けられる前なので、神を信じていた者たちもまだ天に入ることはできず、陰府に下り、アブラハムの懐のところにラザロと同じように入りました。そして、イエス様が十字架で死なれて、その霊はハデスに入られたということです。ここで、「**宣べられた**」とありますが、これは回心のために福音を宣べ伝えたということではありません。贖いが完成したことを宣言するのみです。それで、アブラハムの懐にいる聖徒たちは、キリストと共に天に昇ります。「エペソ 4:8-9 そこで、こう言われています。「高い所に上られたとき、彼は多くの捕虜を引き連れ、人々に賜物を分け与えられた。」この「上られた。」ということばは、彼がまず地の低い所に下られた、ということではなくて何でしょう。」そして、苦しみの場所にいる不従順の霊は、そのまま閉じ込められています。そして最後の審判の時によみがえり、神の裁きを受け、ゲヘナに投げ込まれます。

第二の解釈は、「**捕われの霊たち**」というのが、墮落した天使の霊というものです。その話はノアの時代に起こった、神の子らが人の娘のところに入ったという話に基づいています。「6:1-4 さて、人が地上にふえ始め、彼らに娘たちが生まれたとき、神の子らは、人の娘たちが、いかにも美しいのを見て、その中から好きな者を選んで、自分たちの妻とした。そこで、主は、「わたしの霊は、永久には人のうちにとどまらないであろう。それは人が肉にすぎないからだ。それで人の齢は、百二十年にしよう。」と仰せられた。神の子らが、人の娘たちのところにはいり、彼らに子どもができたころ、またその後にも、ネフィリムが地上にいた。これらは、昔の勇士であり、名のある者たちであった。」この神の子らが、墮落した天使たちであるというのは、ユダの手紙に示唆されています。「6-7 また、主は、自分の領域を守らず、自分のおるべき所を捨てた御使いたちを、大いなる日のさばきのために、永遠の束縛をもって、暗やみの下に閉じ込められました。また、ソドム、ゴモラおよび周囲の町々も彼らと同じように、好色にふけり、不自然な肉欲を追い求めたので、永遠の火の刑罰を受けて、みせしめにされています。」彼らと同じように、とありますから、この墮落した天使たちも、好色にふけたということが言え、人の娘をめとったということにつながります。その霊どもが、暗闇の下に閉じ込められていたのですが、イエス様が下られて、御言葉を宣べられました。

そして第三の解釈です。私はこれが妥当かな？と思います。19 節の、「**その霊において**」というのは、御霊のことです。つまり、キリストの御霊がノアに留まって、そこにいた不信仰な者たちに対して、義を宣べ伝えたというものです。旧約の聖徒たちも、御霊によって預言をしましたが、それはキリストの御霊であったことが 1 章 11 節に書いてあります。「**彼らは、自分たちのうちにおられるキリストの御霊が**」とあります。ですから、ノアが 120 年もの間、箱舟を造りながらそこに居る者たちに義を宣べ伝え、水の裁きが来ることを警告していたのですが、そこに居る者たちは、その言葉に従いませんでした。ノアのうちに働いておられるキリストの御霊が、この言葉をノアに与えられたのですが、彼らは聞き従わなかったということでもあります。このようにして、ノアが正しい良心をもって、証しを立てていたということ。神が裁かれることを畏れかしくみつつ、残された日々を生きていたということ。そしてそのことを、キリストの御霊によって行っていたということです。ですから、私

たちも神の御霊によって、キリストに結ばれた者として、ノアのように御言葉を宣べ伝えるのだということであります。

21 そのことは、今あなたがたを救うバプテスマをあらかじめ示した型なのです。バプテスマは肉体の汚れを取り除くものではなく、正しい良心の神への誓いであり、イエス・キリストの復活によるものです。

ペテロは、水の洪水、ノアの箱舟というものが、バプテスマを示している型であると話しています。箱舟が八人にとって救いとなりましたが、それは水を通して救われました。同じように、キリストの内にある者は、水の中に入ることによってキリストと共に葬られ、水から出ることによってキリストと共に甦ります。このキリストとのつながりによって、神の救いを受けます。ノアの家族八人が、箱舟によって水の中を通過して、それで洪水が引いた後の新しい世界があったように、キリストにある新しい歩み、命にある歩みを始めることができるのです。

そして、ペテロはここで大事なことを話しています。「バプテスマは肉体の汚れを取り除くものでは」ないということです。肉体の汚れ、つまり肉に宿っている罪をバプテスマそのものは取り除くことはできない、ということです。バプテスマによって、心や霊の清めが起こるのではなく、既に清められた良心があって、それによってバプテスマを受けるとのことです。バプテスマによって救われるのではなく、救われたからバプテスマを受けます。そこで、「正しい良心の神への誓いであり、イエス・キリストの復活によるもの」とあります。私たちが、イエス・キリストの復活によって良心が清められました。罪がキリストの十字架によって赦されて、そのことがキリストの復活によって私たちに確証を与えました。実に、自分の罪は赦されたのだ、心は清められたのだということ、死者からの甦りによって与えられるのです。その「誓い」とありますが、自分が確かに救われたことを、いろいろ試されてもそれでも、やはりこの道に進むことを明らかにするために、水のバプテスマを受けます。

22 キリストは天に上り、御使いたち、および、もろもろの權威と権力を従えて、神の右の座におられます。

ペテロは、ノアの話をして少し、必要な脱線はしましたが、キリストの働きを一貫して話しています。キリストが身代わりに死なれ、そして甦られ、それから天の昇られたということです。天に昇られたというのは、ここにあるように、「御使いたち、および、もろもろの權威と権力を従えて」ということです。あらゆる權威よりも高いところにおられるので、それゆえに一切のものを従えることができます。私たち教会が与えられている權威は、いと高き方の右の座におられるキリストから来ています。天と地にある一切の權威をもって、教会が進みます。